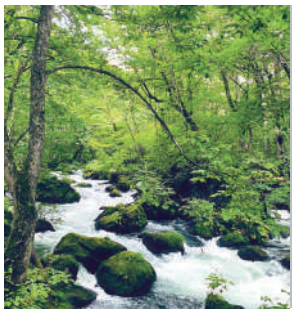

【表紙写真】
苔の森としても有名な「奥入瀬渓流」。渓流の美しさはもちろん、苔に覆われた岩や倒木など、この地域特有の気候が育んだ独特の景観に自然の豊かさを感じました。散策の様子は、P8『のんちゃんのお出かけ記』で紹介していますので、ぜひお読みください!

奥入瀬渓流
青森県十和田市大字奥瀬60
十和田八幡平国立公園内
新幹線・新青森駅、八戸駅、七戸十和田駅よりバス「焼山」下車
※「焼山」は奥入瀬渓流の下流地点の玄関口です。

帰りの新幹線で一献。八戸の銘酒「男山」と、市民の台所で観光スポットでもある「八食センター」で買ったコロッケとすじこのおにぎりが美味でした。

「小さな親切」誌は、季刊発行
春号・5月、夏号・8月、秋号・11月、新春号・1月の予定です

2024年11月1日発行　通巻536号
編集・発行人　鈴木恒夫
発　行　所　公益社団法人「小さな親切」運動本部
〒101-0061東京都千代田区神田三崎町2-20-4
TEL.03-3263-2866　FAX.03-3263-3838
https://www.kindness.jp/
印　刷　所　広研印刷株式会社
©無断転載禁止　落丁、乱丁はおとりかえいたします。

役員リレーエッセイ

「徒然なるままに」

“オバチャン”の慧眼

理事・齊藤英行（株式会社教育新聞社常勤顧問）［さいとう ひでゆき］主に教育・教材に関する分野で編集・研究・出版などの業務に従事。東京は神田の生まれ。

「アンタ、もう退院だねえ」――。入院中の私にそう宣言したのは、主治医でも看護師さんでもなく、〝掃除のオバチャン〟でした。

10数年前に何万人かに一人という脊髄の難病に罹りまして、手術、長期入院を余儀なくされました。手術した病院に1カ月、その後、リハビリのために転院しました。術後すぐはまったく立てない、歩けない、という状態。本当に担当の先生、看護師さんにはお世話になりました。ただ、ここでお話しするのはお医者さんや看護師さんのことではなく、〝掃除のオバチャン〟についてです。

その方はリハビリのための病院にいらっしゃいました。60代半ばくらいの女性で、毎日1回、部屋の掃除をしてくれます。その際、患者さんたちといろいろ話すのですが、結構博識な方でスポーツ、ミステリー、芸能、料理など多彩な話題で会話を楽しませていただきました。入院患者の皆さんは親しみを込めて〝オバチャン〟と呼んでいました。

転院2カ月くらい経ったある日、オバチャンが私の顔をじっと見つめてきました。「なんだろう」と思っていると、「アンタ、もう退院だねえ」と言うのです。主治医にも看護師にも全く言われていません。「そんなこと、全然言われてないですよ」と言うと、「フフフ、私には分かる。これまでどれだけ多くの患者の顔をみてきたと思っているの。もう退院しても大丈夫な顔だよ」と言い切るのでした。

その日の夕方、看護師さんによる検診があり、「そろそろ退院しても大丈夫ですね。先生に伝えておきます」と言われました。ちょっとビックリ、オバチャン大正解。翌日、主治医の回診で、「1週間後に退院」が正式に決まりました。

どうしてわかったのか聞いたところ、患者さんと話しながら顔色、表情、声、話し方などに注意していると変化がよくわかるとのことでした。よくない場合は励ましたり、看護師さんに伝えたりすることもあるそうです。

オバチャンは早くにご主人をがんで亡くし、女手一つで仕事と子育てをされた苦労人です。息子さんは立派になり、かわいいお孫さんもいらっしゃいます。それでも、病院には大変お世話になったので体が丈夫なうちは仕事を続けたい、とのこと。恩返しですね。

患者さんの様子を診るのは本来の職務ではないはず。それでも患者や病院のために職務外のことに留意しているのは、思いやりをもって仕事に取り組んでいるからでしょう。
〝オバチャン〟と毎日楽しくお話しできて本当にうれしかったです。気持ちがほっこりしました。いまでもお元気でいてくださるとうれしいですね。